

テーマ：宗教心理学的研究の展開（11）
—現代社会における「宗教の役割」を考える—

日本神道の立場から 酒井克也(出雲大社和貴講社:Izumotaisha Shrine, Yawaragi group)

1. 伝統的神道の衰退

神社との関わり、地域や家庭内での祭祀など、制度的な意味での神道は、戦後の流動化した生活形態と共に急速に衰退したと指摘されている（石井, 2010）。古き良き、鎮守の森や村祭りなどの風景も、年々失われているのが現実である。

同時に、明治期に確立された「国家神道」のナラティブは、「政治的疑似宗教」などと評価されることが多いが（芳賀, 2011）、特に太平洋戦争後には、海外からは危険思想として見られ、国内からは戦争の反省的風潮として、一層「神道離れ」が進行したのではないだろうか。

2. その後に残ったもの

その後に残ったものは、生活や思考の土台となる「支配的言説（Dominant Story, もしくは Narrative）」として語られる「神道的思想」ではなかろうか。その根源は、海に閉ざされた、しかし同時に大自然の恩恵に満ちた、「島国」という環境で共生を図った、先人の智慧にあろう。

2-1 水の循環を重んじる思想

・「水に流す」思想

神道の行法で大事にされていることは、「水に流す」ことだ。汚れたら水で清めるという考え方とは、水に恵まれたこの列島では、ごく自然に生まれた考え方であろう。具体的な汚れは次第に抽象化され、「心の汚れ」「罪・穢れ」「魔物」なども、清らかな水に身をさらすことによって祓い清められるという、「禊（みそぎ）」の思想につながっていく。

・鎮守の森や山は「水源」

古くからある神社には、山を「ご神体」として挙むものが多い。奈良県の大神（おおみわ）神社の三輪山や富士山などが有名だが、そうした山は「かんなび山（甘南備、神奈備その他多数の表記あり）」と呼ばれ、ヒモロギ（必要に応じて神々に降臨してもらう聖域）とされてきた。それは同時に、大事な水源であり、恵みの森であり、生命の源であった。

2-2 有限の環境を永続させる思想

・伊勢神宮の循環システム

今年は、出雲大社と伊勢神宮の「遷宮祭」が重なり、神社神道に注目が集まっているが、そこにエコロジー的なイメージを重ねる人が少なくない。「伊勢神宮」とは、境内の数百倍の広大な山と森の全域をさすものであり、社殿の木材も、日々のお供え物もすべて、その神域内で得たものであることも、良く知られるようになった。

さらには、解体された神殿や橋などの木材は、全国の末社、神社に下げられ、その修復等に充てられる。こうした「流動的平衡」のシステムにより、伊勢神宮の「常若（とこわか=永遠に成長を続けるとされる思想）」は保たれているのである。

・南方熊楠のエコロジー

かつて、日本に初めてエコロジー理論を紹介した南方熊楠は、明治政府による神社合祀政策を徹底的に批判した。そこで彼が強く訴えたものとは、周囲の自然環境を含めた意味での神社が解体され、日本人の心身の支えである神域が破壊されることの危険性であった。

(南方, 1971)

・すべては「神」が宿るもの

現代社会に広まっているエコロジー理論と“神道ナラティブ”的の違いは、自然環境の「人格化（神格化）」であろう。科学的には「山」は「山」なのであり、環境資源としての物理的存在にすぎないが、神道では、そこには、あたかも自然の「管理者」であるかのような「神々」が降り、住み、我々に語りかける。これにより「親近感」と「感謝の念」が強まるのではなかろうか。

・「トイレの神さま」の感覚

少し前に「トイレの神さま」という歌が流行った。神道ナラティブでは、トイレにも管理者たる神が住み着いているのである。欧米の人々に“The God (Spirit) of Toilet.”というイメージが持てるかどうか、また、その神を親しみ敬えるかどうかは不明だが、こうした感覚に違和感のない日本人の心性こそが、現代日本人の無意識に根差す神道感覚だと考える。

2-3 チームワークを重んじる思想

・稻作の北限地域

「神道とは何か」という問い合わせに対する答えの一つとして、弥生時代以降に日本列島に根付いた稻作文化に培われた、チームワークと勤勉さを旨とする思想であるという考え方がある（安蘇谷, 1994）。確かに、日本列島は稻作の北限地域であるので、東南アジア地域の様に、放っておいても米が収穫できるような環境ではない。非常に計画的、シス

テム的な生産を維持しないと、収穫が安定しないのである。そこに、怠惰を悪とする思想が生まれるのは、至極当然と思える。

・「むすび」の思想

いま、未婚の女性たちがこぞって出雲大社をはじめとする、「縁結び」にご利益があるとされる聖地に巡礼をしている。神道ナラティブでは、ご縁は神々が結んでくれるものである。「結び」とはつまり「産す靈（むすひ＝魂の結合）」であり、その賜物が「むすこ・むすめ」である。人間そのものの「産物」も神々の恩恵に他ならないとする信仰は、現代の科学技術と自我に基づく人生観の限界を乗り越えようとする人々に受け入れられているのかもしれない。

そこには、自我を捨てた「隨神（かんながら＝神の導きに喜んで従う生き様）」を生きる、善き信仰者としての姿を見ることができる。個人主義とは別の、神々の「御蔭（おかげ）」に頼り、感謝する、古来の日本人の姿を垣間見る思いがする。

3. 結び

移動手段や情報網などのインフラが進歩し、人口が爆発的に増加するとともに、地球という環境が「狭く」なってきた現代社会。現代は、イデオロギーの衝突の時代を経て、共生を模索するための智慧を必要とする時代であると考えられる。

「先代旧事本紀」（須藤, 2011）という書物がある（学術上は「偽書」とされ、620年～906年の間に成立した）。真偽はともかく、この書は、伊勢神宮をはじめとする多くの神官の間で読み継がれ、語られてきた神道ナラティブの根幹となる思想書でもある。そこでは、アマテラスとはすなわち「あまねく照らす太陽神」であり、平等思想の象徴である「お天道様」のことである。また、アマツカミ（天津神）とは「自然の神格化」であり、クニツカミ（国津神）とは「祖先の神格化」であるとされる。

結局、今の我々が神道から得たナラティブとは、自然環境や先祖の御靈をすべて「神々」として敬い、その恩恵を平等にいただき、感謝する生き様のことである。今こそ、神道ナラティブに含まれる智慧は、大きな価値を持つのではなかろうか。

引用文献

安蘇谷正彦 1994 神道とは何か ペリカン社

芳賀直哉 2011 南方熊楠と神社合祀—いのちの森を守る闘い— 静岡学術出版

石井研士（編） 2010 神道はどこへいくか ペリカン社

南方熊楠 1971 神社合祀に関する意見 「南方熊楠全集 第七巻」 平凡社

須藤太幹（解説） 2011 先代旧事本紀大成経 先代舊事本紀研究会